

第1部

宮城県気仙沼市方言の調査報告

調査の概要

小林 隆

1 調査の目的

東北大学方言研究センターでは、学生たちが主体となって東日本大震災と方言をめぐる取り組みを行っている。被災地の方言会話を収録した会話集とCDの作成、インターネットを通じての公開はその成果のひとつである。被災地の方言を会話資料のかたちで残そうという取り組みは、5年前から始まった。その成果はこれまで次に上げる会話集としてまとめてきた。

『伝える、励ます、学ぶ、被災地方言会話集－宮城県沿岸15市町－』（2012年度）

※<http://www.sinsaihougen.jp/>センターの取り組み/伝える・励ます・学ぶ・被災地方言会話集/
『生活を伝える被災地方言会話集－宮城県気仙沼市・名取市の100場面会話－』（2013年度）

『生活を伝える被災地方言会話集－宮城県気仙沼市・名取市の100場面会話2－』（2014年度）

『生活を伝える被災地方言会話集－宮城県気仙沼市・名取市の100場面会話3－』（2015年度）

『生活を伝える被災地方言会話集－宮城県気仙沼市・名取市の100場面会話4－』（2016年度）

※<http://www.sinsaihougen.jp/>センターの取り組み/生活を伝える被災地方言会話集/

これらの取り組みの特徴は、地域の言語生活、すなわち、そこに暮らす人々の、言葉による生活の様子を、生き生きとしたかたちで後世に伝える記録を作りたいと考えた点にある。

以上のような方言会話資料を分析し、その結果を補完・発展させるための臨地面接調査を実施することが今年度のテーマである。方言の継承に向けた基礎作業としては、地域の実際の会話を記録することが必要であると同時に、その方言の言語としての特徴を分析的に把握することも重要である。今年度は後者の課題の実践を目指すことにした。

2 調査地域とテーマ

今年度の調査地域は宮城県気仙沼市である。これまで作成してきた気仙沼市の方言会話資料の中から具体的なテーマを発掘し、その課題について面接調査を企画した。何をテーマとするかは、担当者それぞれの興味に従うことにした。

今回調査を行った具体的なテーマを紹介しよう。音韻・アクセント、文法、語彙、そして、言語行動・談話といった広い範囲から15の課題を選んでいる。担当者も合わせて示すことにする。

○音韻・アクセント

- ・語中/k/t/音の有声化（大山雄輔・王雨・麗淑雯）
- ・アクセント規則（寺嶋大輔）

○文法

- ・テンス・アスペクト（津田智史）
- ・条件表現の接続助詞「ケ」の用法（齋藤すみれ・佐藤隆彰・三浦真貴）
- ・「モノ」系終助詞の形態と用法（小原雄次郎）
- ・終助詞「ス」の意味・用法と使用意識（小林冨・今野貴之・島田彩花）
- ・丁寧表現ームード形式、丁寧表現・卑罵表現ー（竹田晃子）
- ・文末詞「(ラ) イン」の丁寧度（八巻千穂・呉雪児・劉海燕）

○語彙

- ・感動詞「ダレ」の用法（坂喜美佳）
- ・接尾辞「ラヘン」の用法（佐藤亜実）
- ・方言語彙「トゼン」類の形態と意味（八木澤亮・魏鈺涵）

○言語行動・談話

- ・言語行動ーあいさつー（中西太郎）
- ・評価に関わる言語行動ー叱る・褒める・非難する等ー（椎名渉子）
- ・「依頼」と「申し出」、および、その「受け」の様相（小林隆・アッニサ リズカ ラマダニ・張暉翎）
- ・自由会話の収録と分析（太田有紀）

3 調査の担当者

上にテーマごとの担当者を示したが、その所属は次のようになっている。

教員：小林隆、甲田直美（東北大学）、竹田晃子（立命館大学）、中西太郎（目白大学）、
椎名渉子（フェリス女学院大学）、津田智史（宮城教育大学）、坂喜美佳（仙台青葉学院
短期大学）

大学院生・研究生：佐藤亜実、小原雄次郎、太田有紀、寺嶋大輔、大山雄輔、王雨、酈淑雯、
八木澤亮、魏鈺涵、八巻千穂、呉雪児、劉海燕

学部生・聴講生：小林冨、今野貴之、島田彩花、齋藤すみれ、佐藤隆彰、三浦真貴、アッニサ・
リズカ・ラマダニ、張暉翎

以上のように、東北大学文学研究科国語学研究室の大学院生・学部生を中心に、研究室 OB の研究者も参加して調査を企画・実施した。特に幹事・副幹事が全体を統括し、調査を導いた。今年度の幹事は次の 2 名である。

幹事：小原雄次郎、佐藤亜実

4 調査の方法

調査は上にも述べたように臨地面接調査の方式で行った。具体的なことは次のとおりである。

調査時期：2017 年 8 月 3 日～8 月 5 日

調査場所：気仙沼市民会館

話者：老年層（60歳代～70歳代）34名

若年層（20代前半）6名

調査協力機関：気仙沼市教育委員会生涯学習課 幡野寛治氏、鈴木志穂氏

気仙沼市民会館

調査の実施にあたっては、話者の推薦から日程の調整、調査会場の確保に至るまで、気仙沼市教育委員会生涯学習課から多大なご支援をいただくことができた。また、気仙沼市民会館には調査会場の借用等でたいへんお世話になった。さらに、話者の方々にはご多忙の中、会場まで足を運んで調査に応じていただいた。これらの方々のご協力なくしては、この調査は実現しなかったと言ってよい。ここにあらためてお礼を申し上げ、感謝の意を表する次第である。

5 報告書の作成

この報告書は、各テーマの担当者が執筆を行ったものである。ただし、今回は大学院生、および、仙台市在住の研究者の報告のみに絞り、全体の成果については今後を期すことにした。

また、成果報告のための費用は平成29年度被災地における方言の活性化支援事業「被災地方言の保存・継承のための方言の記録と公開」から支援を受けている。

なお、気仙沼市方言については、かつて次の調査報告を行っている。

小林隆編（2012）『宮城県・岩手県三陸地方南部地域方言の研究』東北大学大学院文学研究科国語学研究室

この成果は、次の報告書の中にも収められている。

東北大学方言研究センター（2012）『東日本大震災において危機的な状況が危惧される方言の実態に関する予備調査研究（文化庁委託事業報告書）』東北大学大学院文学研究科国語学研究室

今回の調査は、以上の内容を補完する位置付けにあるものとも考えることもできる。合わせてご覧いただくことを期待したい。